

水田長隣加点詠草(下)

神作 研一

解題

前稿^①を承けて、本稿にも、元禄期の上方地下歌人水田長隣(生没年、享年ともに未詳)による添削資料を収載する。影印と翻印、全一七点(すべて岐阜県富加町郷土資料館現蔵)。配列は、先ず年次の判明するもの(三点)をおき、次いで年次未詳のもの(二点)、さらには長隣加点との明証(外部徴証)がないけれどもその筆跡から長隣加点と推断されるもの(二〇点)を並べ、順にG、Uの記号を付した。加えて、厳密には「詠草」と見なされないもの二点——書簡仕立てのV冬音和歌三首と、冬音の伊勢参宮紀行であるW紀行——も、長隣の添削を有しているという事実を考慮して、ここにとりまとめておいた。

さて、それらの書誌的概要は次の通りである(アルファベット次段()内の算用数字は『美濃加治田 平井家文藝資料分類目録』^②の通し番号)。

G (386) 冬音和歌十五首

* 享保四年二月一九日、水田長隣点。

* 12 / 102。

継紙一通。縦一六、六糎×横一四四、五糎。楮紙。冬音詠。奥書「僻墨十一首之内／長二首(茶文鼎印「盈／細」)」。端裏(後書)「享保四亥仲春十九日下ル 長隣加筆」。

H (385) 冬音等和歌五十首

* 12 / 178。

* 享保四年五月、水田長隣点。

切紙八枚仮綴(折紙一枚ヲ上下ニ裁断シテ切紙二枚トシ、ソレヲ八枚重ネタモノ)。縦一五、五糎×横五九、六糎(×八面)。楮紙。冬音・仙庵詠。奥書「僻墨二十五首之内／長六首(茶文鼎印「盈／細」)」。歌上(後書)「仙庵二十首 点八ヶ長式／冬音三十首 点十七長四」。端書(後書)「享保三戊季秋詠出同四年亥仲夏点作下ル水田氏」。付箋「此五十首題ハ作例在之候哉自分ニ御集候哉此方扣ニハ／無之候題ニ候哥之題ハ飛鳥井家冷泉家古来／ヨリ題者之家

I (387) 冬音和歌九首
 二て是ヨリ出ルヲ用申候自分ニ／取集中候事無之候。
 * 享保四年、水田長隣点。
 * 12 / 100。

J (389) 冬音和歌八首
 繼紙一通。縦一六、五糰×横七一、三糰。楮紙。冬音詠。
 奥書ナシ（但シ三ヶ所ニ長隣ノ点印〔茶文鼎印「盈／細」
 アリ）。端裏（後書）「享保四年己亥天 水田氏点」。
 * 年次未詳、水田長隣点。
 * 12 / 185。

K (390) 冬音和歌五首
 折紙一通（一部ニ破レ、虫損アリ）。縦三一、○糰×横四
 三、五糰。楮紙。〔冬音〕詠。奥書「僻墨五首之内／長一
 首（茶文鼎印「盈／細」）。端裏ナシ。
 * 年次未詳、水田長隣点。
 * 12 / 23。

L (391) 冬音和歌七首
 折紙一通。縦三〇、九糰×横四三、○糰。楮紙。冬音詠。
 奥書ナシ（但シ二ヶ所ニ長隣ノ点印〔茶文鼎印「盈／細」
 アリ）。端裏ナシ。
 * 年次未詳、〔水田長隣〕点。
 * 12 / 59。

M (392) 冬音和歌七首
 切紙一通。縦一六、四糰×横四五、九糰。楮紙。冬音詠。
 奥書「右五首とりく／珍重く」〔長隣筆〕。端裏ナシ。
 * 年次未詳、〔水田長隣〕点。
 * 12 / 189。

折紙一通。縦二八、四糰×横四一、一糰。楮紙。冬音詠。

N (393) 冬音和歌六首
 奥書ナシ。端裏ナシ。
 * 年次未詳、〔水田長隣〕点。
 * 12 / 16。

O (394) 冬音和歌五首
 折紙一通。縦三一、六糰×横四四、一糰。楮紙。冬音詠。
 奥書ナシ。端裏ナシ。
 * 年次未詳、〔水田長隣〕点。
 * 12 / 182。

P (395) 冬音和歌四首
 折紙一通。縦三一、一糰×横四四、一糰。楮紙。冬音詠。
 奥書ナシ。端裏ナシ。
 * 年次未詳、〔水田長隣〕点。
 * 12 / 2。

Q (396) 冬音和歌四首
 折紙一通。縦三〇、九糰×横四二、七糰。楮紙。冬音詠。
 奥書ナシ。端裏ナシ。
 * 年次未詳、〔水田長隣〕点。
 * 12 / 15。

R (397) 冬音和歌三首
 折紙一通。縦三一、○糰×横四三、七糰。楮紙。冬音詠。
 奥書ナシ。端裏ナシ。
 * 年次未詳、〔水田長隣〕点。
 * 12 / 179。

S (398) 冬音和歌三首
 切紙一通。縦一五、五糰×横四二、七糰。楮紙。冬音詠。
 奥書ナシ。端裏ナシ。
 * 年次未詳、〔水田長隣〕点。
 * 12 / 22。

T (399) 冬音和歌二首

折紙一通。縦三一、〇糶×横四三、八糶。楮紙。冬音詠。
 奥書「右ハ兼題替り閏月七夕ニなり申候重て御詠出可被
 遣候」。端裏ナシ。

* 12 / 17。

ところで、W紀行は、紀行文に添削を施すというやや特異な形態を
 有している。実は文之字屋資料の中には、この他にも、

○ (419) 明石記行拔書

* 12 / 238。

* 享保二〇年一月、平井冬音著・有賀長伯点。

○ (420) 巡礼記拔書

* 3 / 8。

* 年次未詳、平井冬音著・有賀長伯点。

U (400) 冬音和歌二首

切紙一通。縦一六、四糶×横二三、〇糶。楮紙。冬音詠。
 奥書ナシ。端裏ナシ。

* 12 / 385。

* 年次未詳、「水田長隣」点。

切紙一通。縦一五、五糶×横三九、一糶。楮紙。冬音詠。

奥書ナシ。端裏ナシ。

V (388) 冬音和歌三首

* 年次未詳(文月三日付)、水田長隣点。

* 12 / 203。

切紙一通。縦一五、四糶×横四〇、三糶。楮紙。奥書ナシ。

長隣宛ノ書簡仕立て(文月三日付)。末尾「右奉納和哥可

然御加筆奉願候ノ百首ハ遅々御覽可被下候奉納哥ハノ御覽

次第返書御遣可被下奉待候ノ上(後書)冬音ノ文月三日ノ

下(後書)長隣様。

W (417) 紀行

* 享保七年五月、平井冬音著・水田長隣点。

* 3 / 1。

横本一冊(折紙ノ真中ヲ二ツ折ニシテ、仮綴シタモノ)。

縦一五、九糶×横二一、八糶。外題「紀行 平井冬音上」。

内題ナシ。伊勢参宮紀行。和歌二八首所収。楮紙。七・五

丁。奥書「僻案愚墨二十五首並ノ詞書花実兼備尤珍重二候
 ノ不遠斎(茶文鼎印「盈ノ細」)」。

の二種がやはり同形態をとっているのだが、子細に紙面を観察してみ
 ると、どの作品も地の文に対して和歌が二、三字程度上げて記されて
 いることに気付かされる。こうした書承の在り方は、和歌を詞書から
 二字程度上げて記す通常の歌集に近い意識で書かれたことを思わせる
 から、著者の側にも添削者の側にも、ことさらに「紀行文の」添削と
 いう意識は希薄だったのではないかと思量できよう。

因みに、W紀行の場合、添削後の本文に基づいた清書本すなわち冬
 音自筆本が、天理大学附属天理図書館竹柏園文庫に所蔵されている
 『勢武道之記』* 九一四・六ノ六九。後半には、同年の江戸紀行を合
 綴。こちらも長隣の添削を経たものか。識語や奥書は見出されない
 ものの、被添削者(冬音)の思考——指導に対する従順性——を知る
 上でも興味深い事例だと見なされる。

なお、長隣の添削の方法をめぐっては、このほど別稿にまとめる機
 会を得た。以て参看を乞う。

最後に、翻印にあたっては、これまでの翻印方針をおおむね踏襲し、見せ消ちなど添削の様子をそのまま再現することをせずに、添削の結果成立した新しい本文を原歌の次行に置くなどした。詳細は、次掲「凡例」につかれたく、また適宜影印を参照願いたい。

注

- (1) 拙稿「水田長隣加點詠草（上）」（本誌四卷一号、二〇〇七・九）。
 - (2) 加治田文藝資料研究会編、富加町教育委員会発行、二〇〇五刊。
 - (3) 同右『目録』418番（一一四頁）。なお、『竹柏園蔵書志』（佐佐木信綱、巖松堂書店、一九三九。臨川書店、一九八八復刻）四〇八頁所掲。
 - (4) 拙稿「点者としての水田長隣」（龍谷叢書『日下幸男先生華甲記念 中世近世和歌文芸論集』所収、龍谷学会、二〇〇八・七刊行予定）。
- 〔付記〕所蔵資料の紹介を許された富加町郷土資料館に厚く御礼申し上げます。
（かんさく・けんいち 本学文学部教授）



*12/91 (原寸大)

凡例

- 一、影印にあたっては適宜縮小し、なお一部に原本の余白を切り継いだ。特に折紙にしたためられたH・J・K・M・Q・Sについては、本誌面の都合上、大きく原態に手を入れたところがある。
- 一、影印編・翻印編とも、和歌の頭に通し番号を付した。
- 一、原歌の次行に、添削後の新しい和歌本文を併記した。
- 一、評語は〈 〉内にくるんで掲出し、適宜句読点、引用符（「」）を施した。長隣の評語に頻出する「仍——」の「仍」以下のところには、添削後の新しい和歌本文が入ると受け止められたい。
- 一、合点を「○」、長点を「◎」で示した。
- 一、「〔 〕」内は、神作による注記である。
- 一、漢字は、おおむね通行の字体に改めた。
- 一、和歌本文、評語とも、適宜濁点を付した。
- 一、虫損等による判読不能箇所は、□で示した。
- 一、誤字や脱字、仮名遣いの誤りについても原本のままとし、適宜（ママ）と注記した。
- 一、W紀行の翻印は、なお次のようにした。
- 1、地の文の添削は、見せ消ちと傍書で示した（和歌に関しては従前）。
- 2、丁移りは、「もしくは」(1ウ)の如く示した。

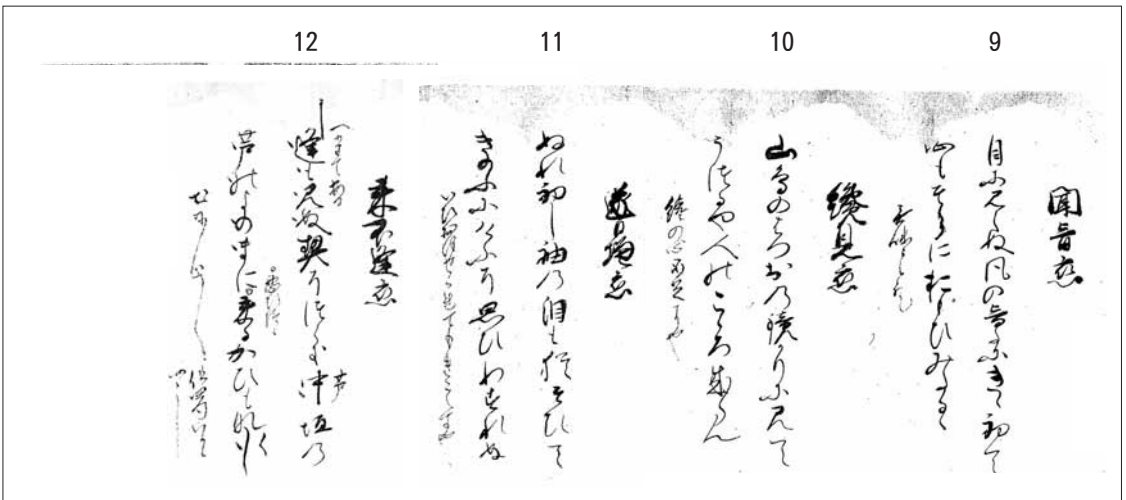
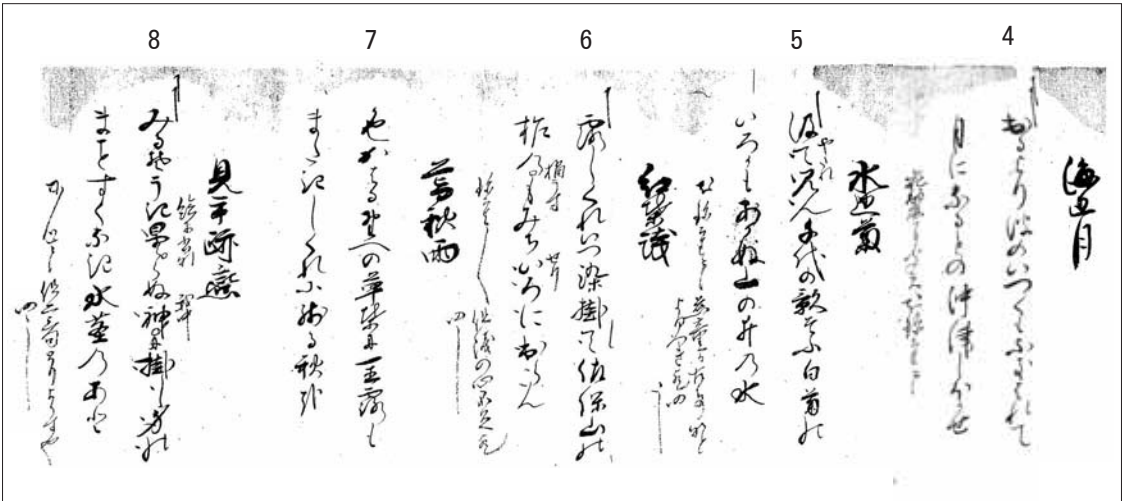
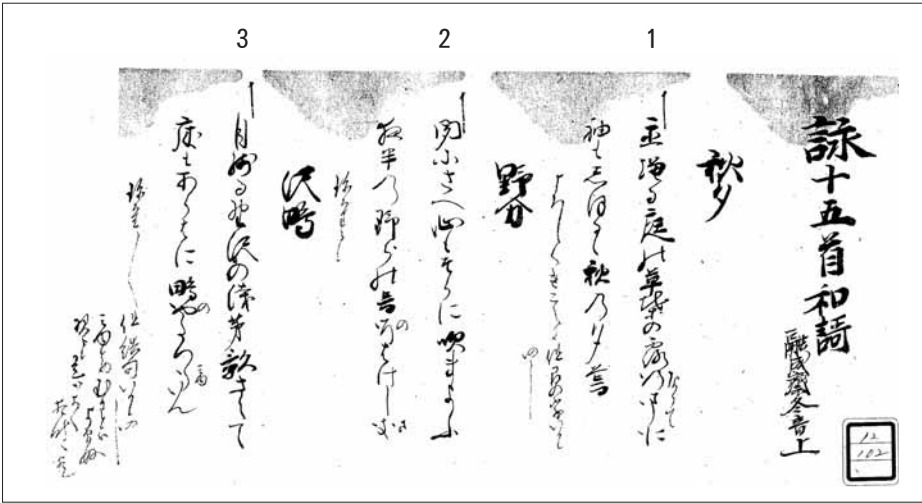
〈影印編〉

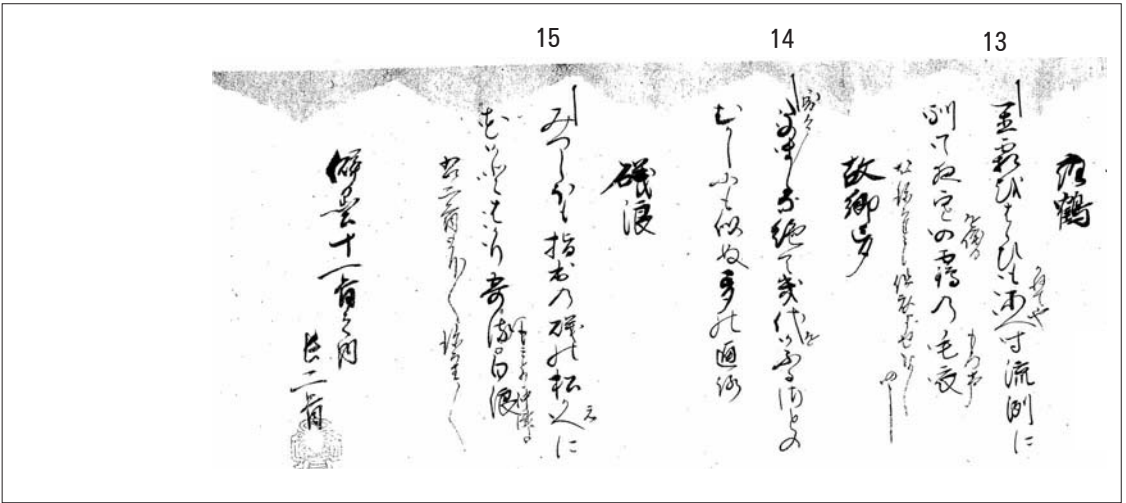
G 冬音和歌十五首

* 享保四年二月一九日、水田長隣点。

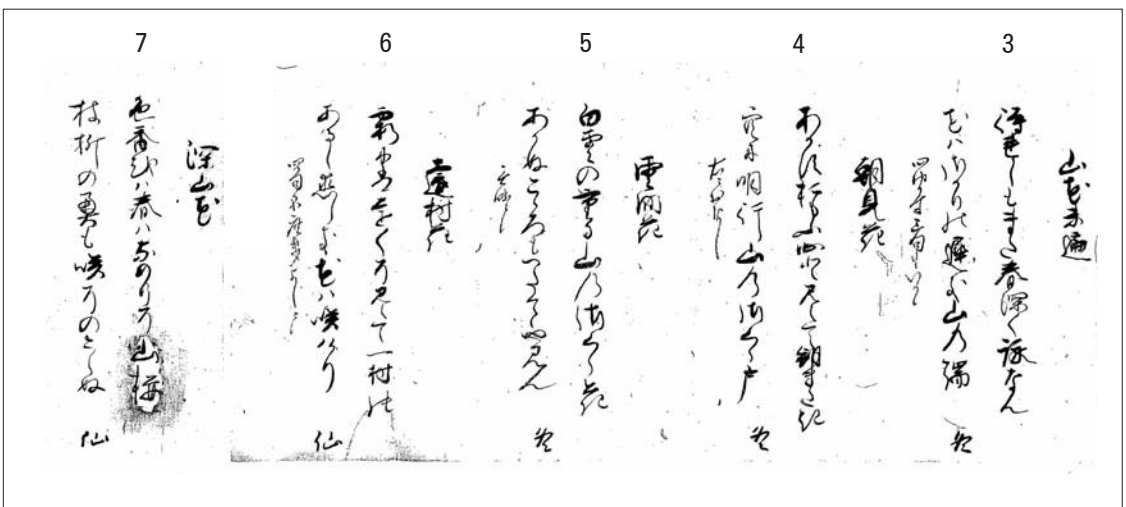
(端裏)

享保四年二月十九日





H
 冬音等和歌五十首
 *享保四年五月、水田長隣点。
 (端書)
 享保四年五月、水田長隣点。



<p>12 春はさくらにふしの海を 春のむかしはては遠き 南上七</p>	<p>11 海は春は長閑にほろり 海は春は長閑にほろり 仙</p>	<p>10 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>9 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>8 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>
--	---	---	--	--

<p>17 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>16 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>15 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>14 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>13 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>
---	---	---	---	---

<p>22 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>21 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>20 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>19 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>	<p>18 春はさくらにふしの海を 春はさくらにふしの海を 仙</p>
---	---	---	---	---

<p>27</p> <p>うらして明をのりに見ゆ月 と浦のうらたすまのうら （うらたすまのうらたすまのうら）</p> <p>仙</p>	<p>26</p> <p>秋と種をほはる人暮草かきり 氣入ふよ小あまの月教 （二五句の月明り一五句見）</p> <p>仙</p>	<p>25</p> <p>月はいくせにゆきて曲れふ （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>	<p>24</p> <p>秋はよまのありの行日教 更て休ふ谷入下庵 （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>	<p>23</p> <p>月照臨水 きつたる目に乱きてあはれは 水のみらる秋ふすむん （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>
---	--	---	---	--

<p>32</p> <p>種をふく首のうらたすまのうら （うらたすまのうらたすまのうら）</p> <p>仙</p>	<p>31</p> <p>まはるる人（二）のうらたすまのうら （うらたすまのうらたすまのうら）</p> <p>仙</p>	<p>30</p> <p>大方の月をすけりふ （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>	<p>29</p> <p>月明り信白八雲は子枝のひかり （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>	<p>28</p> <p>月明り師を又ては月 （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>
---	--	--	---	--

<p>37</p> <p>小男麻の秋の稲葉は月教ふ （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>	<p>36</p> <p>秋のぬれ月よみるるわとんふ （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>	<p>35</p> <p>月明りをに月を種ふ （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>	<p>34</p> <p>月明りに何とうみてきり月 （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>	<p>33</p> <p>月明り初のいけふすむ月 （ゆきゆき）</p> <p>仙</p>
---	--	--	---	--

42
 月か
 神を祀りて
 神を祀りて
 神を祀りて
 神を祀りて
 神を祀りて

41
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

40
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

39
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

38
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

47
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

46
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

45
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

44
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

43
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

50
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

49
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

48
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中
 舟中

（付箋）

此草有頃... 長隣... 加點詠草... 神作研一

I 冬音和歌九首

* 享保四年、水田長隣点。

（端裏）

享保四年己亥天 水田長隣

兩節和詩

平井春上

元日

1 春の色の松隈ふ

ふ代を踏ひし今朝は水

2

長閑か山より春の音

ひりしと春はむく

3

右年ふ立は春はむく

今朝は春はむく

此心は春はむく

幸の春

4

年ふ立は春はむく

今朝は春はむく

5

ふく年の空は春はむく

吾けの空は春はむく

言果ぬ年ふ立は春はむく

惜しむ年ふ立は春はむく

惜しむ年ふ立は春はむく

歳暮

7

こころは今年と化す夢か

ふくむ心は春はむく

8

言はれぬ年ふ立は春はむく

言はれぬ年ふ立は春はむく

9

言はれぬ年ふ立は春はむく

言はれぬ年ふ立は春はむく

下句は春はむく

J 冬音和歌八首

* 年次未詳、水田長隣点。

(端裏) ナシ

1 秋の色もほろりくく杜の森
 本のはつらつら冬まにたぐ
 初音のなやみかみり

2 住寺のあやまけくゆり
 ひくまけ入相の〇
 梅のこぼれ雪のまじり

3 雪中舞后
 初音はしら雪のまじりに
 三月まであやまけくゆり
 雪のまじり雪のまじり

4 初音のこぼれ雪のまじりに
 浪あまのこぼれ雪のまじりに
 初音のこぼれ雪のまじりに

初音のこぼれ雪のまじりに

K 冬音和歌五首

* 年次未詳、水田長隣点。

(端裏) ナシ

5 己まやと河原の月影
 雪のまじり雪のまじり

6 三のひかき音にあやまけ
 さくら雪のまじりかき
 雪のまじり雪のまじり

7 雪のまじり雪のまじり
 声れわいてまよふゆり
 雪のまじり

8 雪のまじり雪のまじり
 おののけり雪のまじり
 雪のまじり

雪のまじり

K 冬音和歌五首

* 年次未詳、水田長隣点。

(端裏) ナシ

1 初音あやまけくゆり
 初音あやまけくゆり
 初音あやまけくゆり

2 初音あやまけくゆり
 初音あやまけくゆり
 初音あやまけくゆり

初音あやまけくゆり

3 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井

4 袖のうす荒れ草の
 雨そよ

5 千世不音人の物
 ありか

冬音和歌七首
 * 年次未詳、〔水田長隣〕点。
 (端裏) ナシ

1 天川水清く名を流す
 わさねの舟
 五月

2 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井

3 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井

4 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井

5 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井

6 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井

7 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井
 秋の雨かゝる字井

M 冬音和歌七首

*年次未詳、〔水田長隣〕点。

(端裏) ナシ



七日高尾

秋秘

1 秋長河を夜床のほろけは

月さうみくわをほろけは

2 くれをよあまの秋とれ

ゆくいさ道の程ふ

七條の程ふ

白七日高尾
考知点

3 秋中ハまきもえせぬ酒を

きつりつたれをわにまき

4 月夜今もさきれや二つと

花にもあはれすの秋

七條の程ふ

九月菊初香

風送菊香

考知点

5

初香のほろけは金に

菊の香

6

白の初香のほろけは

月さうみくわをほろけは

7

白の初香のほろけは

N 冬音和歌六首

*年次未詳、〔水田長隣〕点。

(端裏) ナシ



冬音上

歳旦

1 冬かたる年乃之の歳

改えて世は人をみれ

春の朝元出

2 世はゆるむ也霞いと

花を省ふ途一

花乃初春

3 寄あつてつらう綱より志と
 度日ふみまもまいて
 白ふらふや
 歳暮

4 わさきも春のいろおに
 ききればはるよきて

5 木もよふをまて
 言ふてやをいあぬ
 年の必しも

6 ねてせつとれとて
 身もはれするもま
 三年はる

〇 冬音和歌五首

* 年次未詳、〔水田長隣〕点。

（端裏）ナシ

1 今をよれり代も
 池水もす冬みりれ
 亀のよめいま
 四十の冬
 對亀年輪
 冬音

2 池もまにらるる亀不
 洲てれ齡りあせぬ
 万代のま

3 老てま成亀乃うま
 心とのまのよらひら
 寝いかまじし

あは
 未度忌

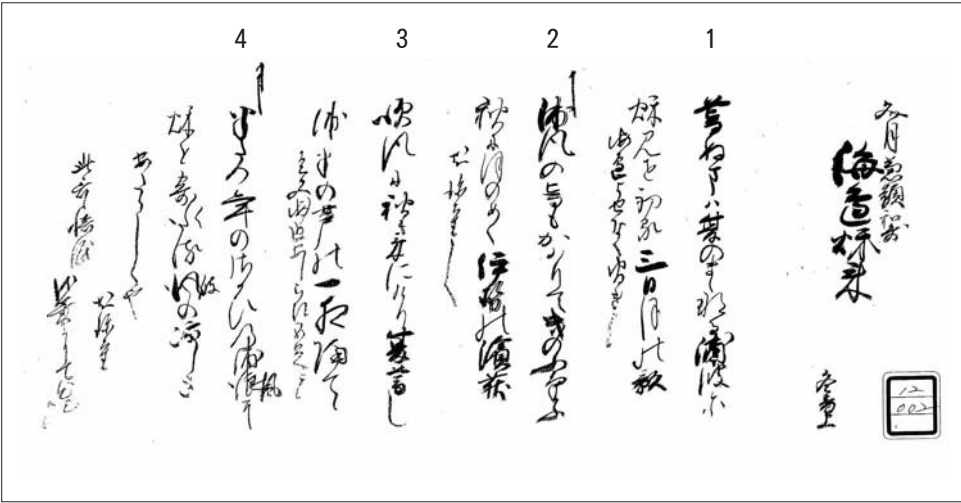
4 親かゝる身にも
 長席ににらやまね
 人のわが身

5 二つをひらひら
 卯辰のすくかみよ
 何みすまはら

P 冬音和歌四首

* 年次未詳、「水田長隣」点。

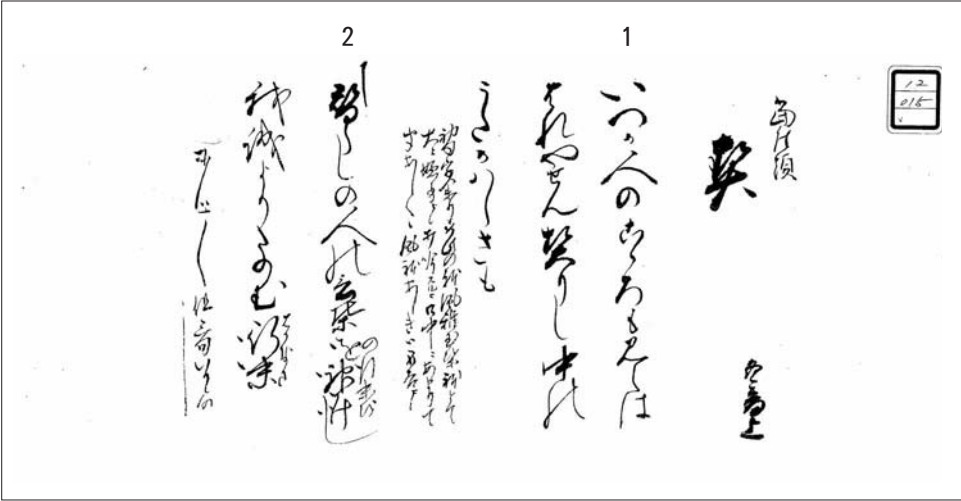
(端裏) ナシ



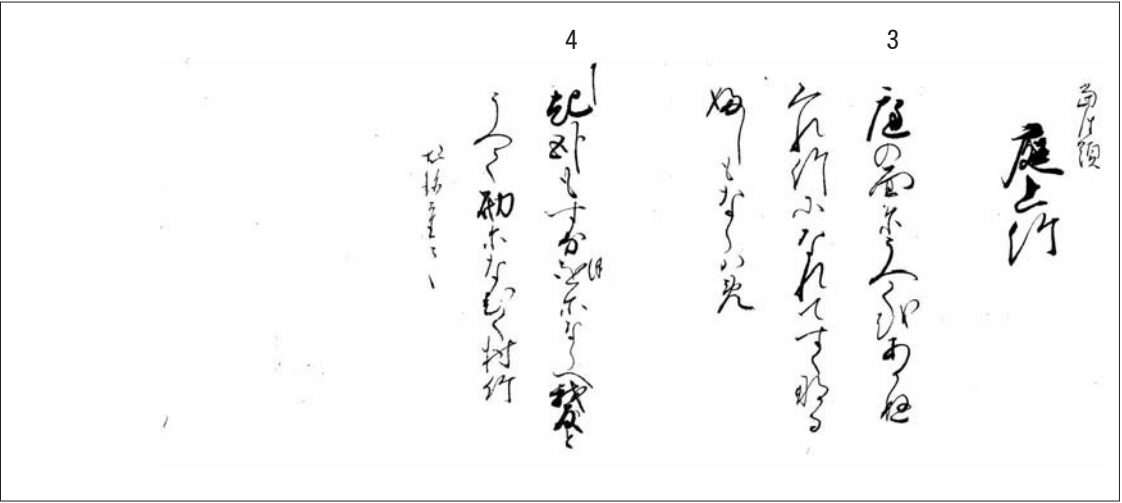
Q 冬音和歌四首

* 年次未詳、「水田長隣」点。

(端裏) ナシ



冬音和歌四首



R 冬音和歌三首

* 年次未詳、〔水田長隣〕点。

（端裏）ナシ

12
122

1 夕三の舟寄河く無添く
外心の舟も鳴る月片
冬重

2 清くしあかしく松葉
雪の音も舟も月教
冬重

3 舟も心も舟も月
下重

S 冬音和歌二首

* 年次未詳、〔水田長隣〕点。

（端裏）ナシ

12
122

1 舟も心も舟も月
冬重

2 舟も心も舟も月
冬重

3 舟も心も舟も月
冬重

T 冬音和歌二首

* 年次未詳、〔水田長隣〕点。

（端裏）ナシ

12
122

1 舟も心も舟も月
冬重

2 舟も心も舟も月
冬重

U 冬音和歌二首

(端裏) ナシ

* 年次未詳、〔水田長隣〕点。



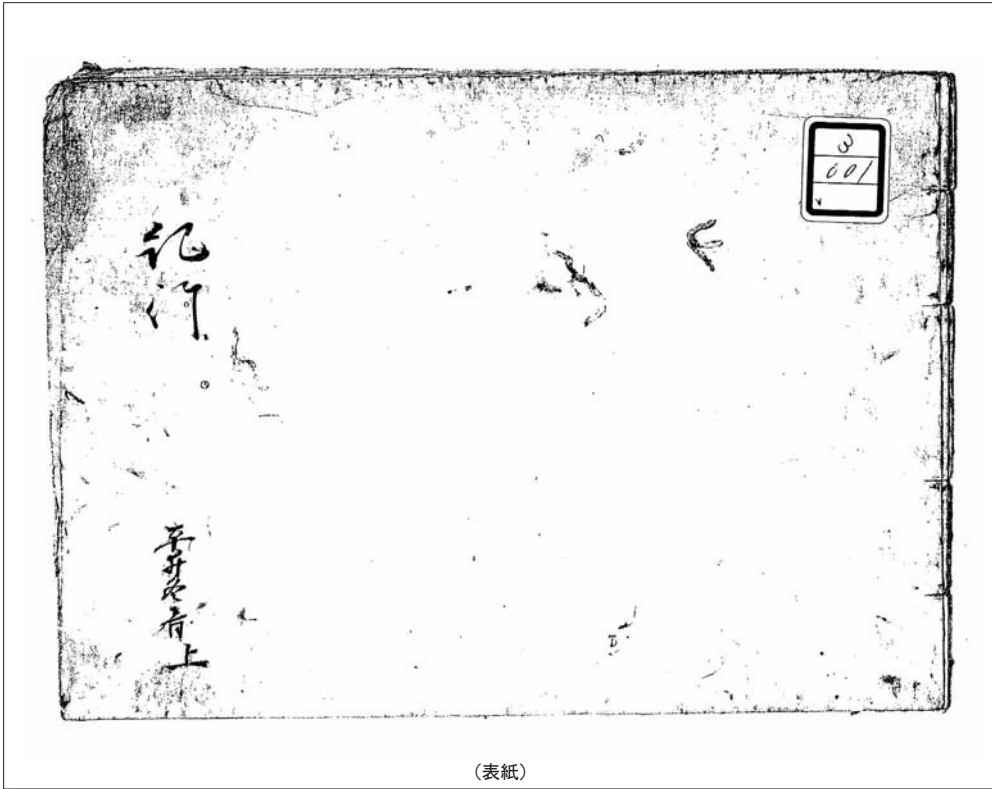
V 冬音和歌三首

* 書簡仕立て(文月三日付)。水田長隣点。

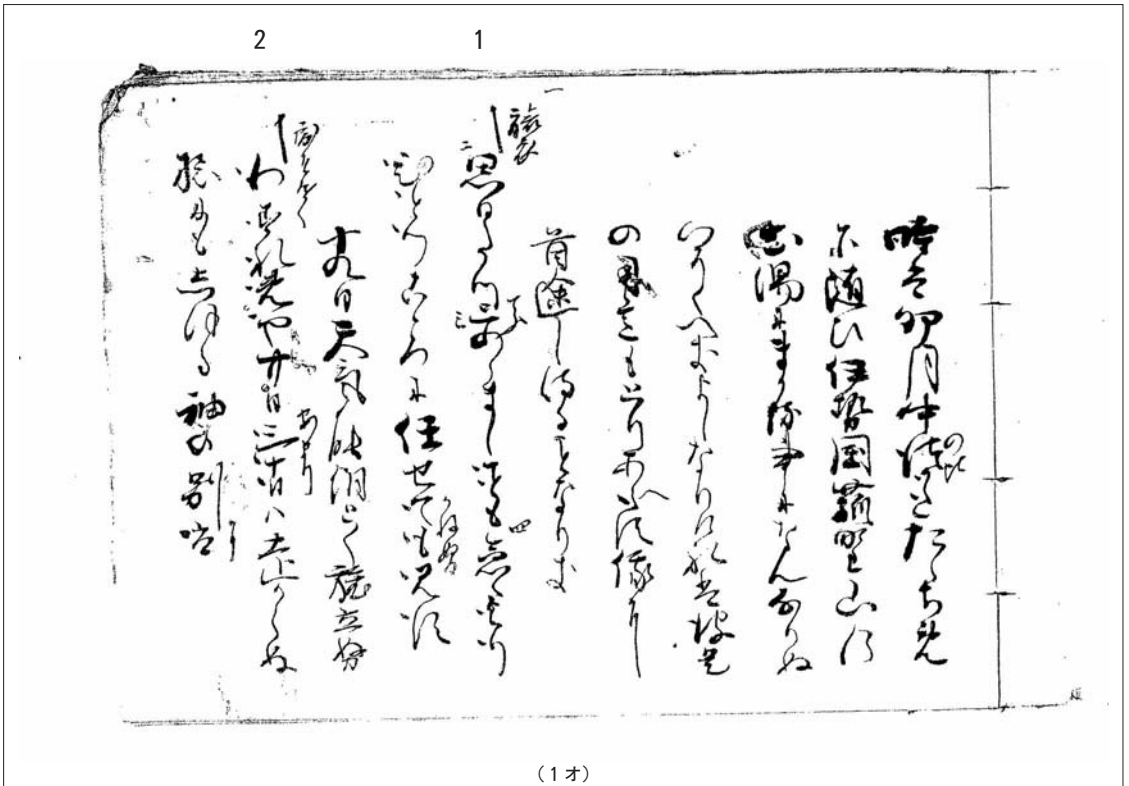


W
紀行

*享保七年五月、平井冬音著・水田長隣点。



(表紙)



(1才)

6 5 4

家松
 目井所くちるもふとまをきて
 あやいさるこに志こ川水
 ほの言は垣のさしは清く
 川より海へのさる舟
 ねのよき清蓮のあふれ
 うけし所くちる海
 中島守の根のさる
 リ秋はどわねて風を舟の
 浪のさるはさる

(2ウ)

8 7

家松
 まるく行舟向よる
 しの所を白くさるあり
 江のさるさるはさる
 舟の氣色をさるはさる
 かさるちりに夕さる雨さる
 のさるはさるはさる
 舟根をさるはさる
 かにさるはさるはさる
 雨のさるはさるはさる
 舟根をさるはさるはさる

(3オ)

いづれかよねのけし
 谷の所はさるといせしを
 奥れかまうとまをけりよ
 谷の所はさるといせしを
 かくも湯のほろりやうんたぬ
 まらとの隙まをそ甲の家有
 く二階三階の橋とあるくのみ
 文由何りの家と家た家
 けりきくむうりまあり
 同一とまひくねのあしけ
 休と物の言わぬをうけ

(3ウ)

10 9

たふのまむとは何れも
 の海りありけりよ海人の
 きたてて三行廻りつる
 よて眺字かより眺て
 外りまもまらるる月
 ありいともまじりけり
 引ゆるまじりの程り
 理いありしよまらるる
 つきの満月期つり
 けはまらるるまらるる
 風のまらるる

(4オ)

11

何れもはなれぬ女をねむく
ゆふり美く春の夜さよ

水語むすこ

12

引の徳をわとれし神よみお
たぐもる勢あるあふや

勢の中はほもあはと國え

13

誇りありお祈りおのほや
かきうつりゆきのすうに

都をぐすの類のさるねおの

日けちとむすほもあは

古のうつりゆきのすうに

14

(4ウ)

15

ふりの信所は言物あはる

やゆえはるほしき

おつるは信所は言物あはる

おつるあはるの信所

温泉の湯ありて帰る

よみ漏余節橋言はるみ

おゆわたりて南を薬師といふ

ぬきおのよみありて一頁

一頁ありて

たぐもる勢あるあふや

日けちとむすほもあは

16

(5オ)

21

20

19

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

伝ひて師の請ふありきこゝ

類に言はるるのつらき

みぢかきかこよの言に

みぢかきかこよの言に

みぢかきかこよの言に

みぢかきかこよの言に

みぢかきかこよの言に

みぢかきかこよの言に

大泥の浦とくものつらき

(6ウ)

24

23

22

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

大泥の浦とくものつらき

(7オ)

27

26

25

香具園の神社不修て日の
 言ふ人海色井道途一掃り
 一とれを葉ふり同も一とれ
 けみ打を任替り演奏
 一とれ海の子船と海とけふ
 一とれつゝある其帆の遊風
 一とれ海色御田の村とありと
 一とれ海色世の川舟もれとありと
 一とれ海色神のふらふらとありと
 一とれ海色土のたのしみとありと
 一とれ海色空のつとめとありと

(7ウ)

28

一とれ海色海とありとありとありと
 く立とありとありとありとありと
 一とれ海色海とありとありとありとありと
 かよふとありとありとありとありと
 一とれ海色海とありとありとありとありと
 一とれ海色海とありとありとありとありと
 一とれ海色海とありとありとありとありと
 一とれ海色海とありとありとありとありと

(8オ)



(8ウ)



(後表紙見返し)



(後表紙)

〈翻印編〉

G 冬音和歌十五首

〔端裏〕 享保四亥仲春十九日下ル 長隣加筆
〔内題〕 詠十五首和詞／融成齋冬音上

秋夕

1 置増る庭の草葉の露のまに袖もしほる、秋の夕暮

○置増る庭の草葉の露ならで袖もしほる、秋の夕暮

〈よろしくきこえ候。但「間」の字、いかゞ。仍——〉

野分

2 聞にさへ心もそらに吹まよふ夜半の野分の音ぞはげしき

○聞にさへ心もそらに吹まよふ夜半の野分の音のはげしさ

〈珍重に候〉

沢嶋

3 月残る野沢の浅茅影さえて床もあらはに嶋やたつらん

○月残る野沢の浅茅影さえて床もあらはに嶋のたつみゆ

〈珍重——。但結句、いかゞ。仍——。「みゆ」どめ、む

ざとはよまぬ習に候。是は、よく相叶候歟〉

海辺月

4 ◎出るより波のいづくもふきはれて月になるとの沖つしほかせ

〈花麗に聞え、尤珍重に候〉

水辺菊

5 汲て見ん千代の影そふ白菊のいろかもあかぬ山の井の水

○波やたれ千代の影そふ白菊のいろかもあかぬ山の井の水
〈尤珍重に候。慈童が古事など、よるべき歟。仍——〉
紅葉浅

6

露しぐれいつ染掛て佐保山の柞のみみちいろに出らん
○露しぐれいつ染掛し佐保山の柞の梢うすもみぢせり
〈珍重く。但「浅」の字、不足歟。仍——〉

暮秋雨

7

色かはる野への草葉に置露もまだきしぐれに残る秋哉
見手跡恋

8

みるぞうき曇らぬ神に掛し身のまことすくなき水茎のあと
◎みるぞうき絵に書ならぬ我中にまことすくなき水茎のあと
〈甘心に候。但二、三句、とりよらずや。仍——〉

聞音恋

9

目に見えぬ風の音だにき、初て心もそらにおもひみだる、
〈無味に候歟〉
纒見恋

10

山鳥のはつおの鏡（マ）かりに見てうつるや人のこゝろ成らん
〈「纒」の心、不足にや〉

逐日増恋

11

ぬれ初し袖の泪も猶そひてきのふにけふに思ひわすれぬ
〈いひおほせられてもきこえずや〉
未不逢恋

12

逢も見ぬ契ぞつらき中垣の蘆のよのまに来るかひもなし

○へだてある契ぞつらき蘆垣のよに忍びつゝ来るかひもなく
〈尤甘心く。但四句、いかゞ。仍——〉
夜鶴

13

置霜をはらひもあへず流洲に馴て夜寒の鶴の毛衣
○置霜をはらひかねてや流洲に夜寒を侘る鶴のもろ声
〈尤珍重に候。但「衣」、よせなし。仍——〉

故郷夢

14

たのまじな絶て幾代かふるさとのむかしにも似ぬ夢の通路
○露けしな絶て幾代をふるさとのむかしにも似ぬ夢の通路

磯浪

15

みづしほも指出の磯の松がへ（マ）に花かとはかり寄る白浪
○みづしほも指出の磯の松がえに寄るもみどり沖つ白浪
〈右二首、とりく珍重く〉

〔奥書〕僻墨十一首之内／長二首（茶文鼎印「盈／緋」）

H 冬音等 和歌五十首

〔端書〕享保三戌季秋詠出同四年亥仲夏点作下ル水田氏
〔内題〕詠五十首和調／長沼仙庵上／平井冬音上

初春待花

1

咲ぬべき花をもいつとはつ春の空にしられて待ぞ久しき

冬

◎かならずと咲べき花をはつ春の空にかぞへて待日数哉

〈仕立、無味に候。仍——。珍重〉

山路尋花

仙

花見んと思ふこゝろに誘はれていとほでたどる山路なりけり

○花見んと思ふこゝろに誘はれて奥もいとほぬ春の山ぶみ

〈珍重に候。但結句、尾がれに候。仍——〉

山花未遍

冬

待れしもまだ春深く詠なん花はさかりの遅き山の端

〈心ゆかず。三句もいかゞ〉

朝見花

冬

あかずおもふ心と見えて朝まだき空に明行山のさくら戸

〈右におなじ〉

雲間花

冬

白雲の重る山のさくら花あかぬこゝろもへだて、や見ん

〈無味に候〉

遠村花

仙

霞には遠くぞ見えて一村のあるじ恋しき花は咲けり

〈四句、不庶幾よしに候〉

深山花

仙

色香をば春はなのりそ山桜枝折の奥も咲ぞのこらぬ

古溪花

冬

咲にけり花も年経るたにかけいとゞ老木の春をむかへて

○咲にけり年経るたにの松かけに花も老木の春をむかへて

〈尤甘心に候〉

橋下花

冬

落滝つ波もひとつに埋れて花にあとなき谷の柴橋

○落滝つ波もひとつに埋れて花にぞわたす谷の柴橋

〈是又珍重。但四句、心ゆかず。仍——〉

暮山花

仙

帰る山麓の道はたどるとも花に名残は暮はつるまで

〈趣前、帰山に花をよめる作例なくや〉

海辺花

仙

塩風も春は長閑に波よする磯山ざくらさきにほふなり

◎塩風も春は長閑に波よする磯山ざくら今さかりなり

〈体よろしく、甘心。但結句、いかゞ。仍——〉

湖上花

冬

磯山の花をひたして立浪も春はさくらににほの海面

○磯山の花をひたしてさゞ浪も春はさくらににほの海面

〈尤甘心——〉

関路花

仙

春は猶かすみの関と色深く花や行来の人とゞむらん

〈下、よはし〉

羈中花

冬

野山にもまくら定めず行末は花のかけこそやどりなりけれ

○野山にもまくら定めず都出て花のかけこそやどりなりけれ

〈是又珍重——。但三句、心ゆかず候。仍——。「羈中」

もよはし

故郷花

仙

15 年毎の春をあるじと咲花はふるさと、ても色香へだてぬ

○年毎の春のあるじと咲花はふるさと、ても色香へだてぬ

〈よろしくきこえ候〉

古寺花

冬

16 ○人目さへ絶ず御法の春にあふ花の盛りを古寺の庭

〈珍重に候〉

花下送日

冬

17 けふも又日影うつろふ夕ま山いつしか花に家路わすれて

〈ゆふ山には花をよめり。「ゆふま山」にはよまず。いかゞ〉

庭上花

仙

18 あやにくのこゝろと花もおもふらめ庭のさくらに目枯をもせぬ

○あやにくのこゝろと花やおもふらん目枯をもせぬ庭のさくら

〈甘心く〉

花似雪

仙

19 み芳の、山に八重たつ白雲も見えて梢の花ざかりかも

〈無味に候上、平尾病見え候〉

暮春惜花

冬

20 むしめたゞ日数のこらで行春と共にうつろふ花の名残は

○おしめたゞ日数のこらで行春と共にうつろふ花の名残は

〈よろしくきこえ候〉

初秋月

冬

21 一葉のみちりかゝる秋も小初瀬の木の間の月に山風ぞふく

○一葉ちる秋きにけりと小初瀬の木の間の月に山風のふく

〈珍重に候。但第二句、字余りも不庶幾事に候。仍——〉

雨後月

冬

22 類ひなや待間いとひし村雨もはれてひときは澄る夜の月

○類ひなやいとひし雨も山のはにはれてひときは澄る夜の月

〈尤甘心に候。但「待間」、むつかし。仍——〉

月照滝水

冬

23 さやかなる月に乱れて落滝つ水のみどりも秋にすむらん

〈みだれて〉のよせ、なし

山居月

仙

24 秋風に木の間もり行月影も更て淋しき谷の下庵

○秋風に木の間もりくる月影も更て淋しき谷の下庵

〈よろしく候〉

野径月

仙

25 大江山ほのめく影のさしのぼる月はいく野に出て曲なき

◎大江山ほのめく影も空たかく月はいく野に出て曲なき

〈下旬など、殊によろしく候〉

沢辺月

冬

26 秋を経て沢辺の水草かるゝより影さへふかき夜半の月影

〈二、三句、冬月などには相応歟〉

旅泊月

仙

27 うきねして明石とまりに見る月はこと浦よりも猶すめるかは

- 33 ○影さえて砌のいけにすむ月や波のよるく上氷るらん
 〈珍重に候〉
 月前虫 冬
- 32 植（マユ）をきし菊のまがきに澄月は是も千年の秋やちぎれる
 菊籬月 仙
 〈題、上句につき候。下、無味に候〉
 月似氷 冬
- 31 またれつる人さへこすのひまもりて更行窓の月ぞ淋しき
 ○またれつる人さへこすのひまもりて更行窓の月の淋しき
 〈よろしくきこえ候〉
 窓中月 冬
- 30 ○久方の月も光をますかゞみ御裳濯川に影をとゞめて
 〈珍重〉
 社頭月 仙
- 29 風吹ば信田の森の千枝のひまもりて夜深く澄る月影
 ◎晴にけり信田の森の秋風に千枝のひまもる夜半の月影
 〈珍重に候。但上下かけあひ、あしくや。仍——〉
 社頭月 冬
- 28 霧はるゝ跡より見えて澄月のよごの入江をわたる舟人
 〈片頭病に近くや〉
 杜間月 冬
- 34 諸共に何をうらみてきりくす更行月の夜たゞなくらん
 ○なれば又何をうらみてきりくす更行月の夜たゞなくらん
 〈よろしく候〉
 月前草花 仙
- 37 小男鹿は秋の稲葉の月影に馴て今夜も妻やこふらん
 〈右三首、とりく首尾しては聞ゆれど、今少ちからなくや〉
 月前竹風 仙
- 36 秋の夜の月にみがける玉と見よ草葉がうへにをける白露
 月前露 仙
- 39 ぬるまさへ波にたゞよふ月影にうきて筏の床も見えけり
 〈初句、いかだし（マユ）士の事歟、此方の事歟、聞さかへがたし〉
 月前筏 冬
- 40 限あれば心細しや秋もはや末野にのこる有明の月
 ○見るも猶心細しや行秋の末野にのこる有明の月
 〈景気、尤甘心に候。但初句、断過たる歟。仍——〉
 暮秋月 冬
- 41 月ならで心に掛る天雲は又うき中のさはりとまがな
 〈願の「哉」、いかゞ〉
 寄雲恋 冬

42 〔寄〕風〔恋〕 冬
頼まれぬちぎりはいつか音信もかれくゝにふく葛のうらかせ

○頼まれぬちぎりにはいでぬ音信もかれくゝにふく葛のうらかせ
〔尤甘心に候。但一、二句、重畳候歟。仍——〕

〔寄〕雨〔恋〕 冬

色に出て恋に我名やたつた姫袖にしもまつ時雨初けん

〔落着、いかゞ〕

〔寄〕木〔恋〕 仙

恋衣重ねる色はかはらじとちぎりをこめし森の常盤木

〔四句など、いひおほせずや〕

〔寄〕草〔恋〕 仙

しらざりし草のはつかの思ひより茂る夏野に踏まよふとは

○しらざりき草のはつかの思ひより茂る夏野に踏まよふとは
〔甘心——〕

〔寄〕獸〔恋〕 冬

我ならでおもひやまぢの妻恋に寄しかさへも身をつくすらん

◎人よしれおもひやまぢの妻恋に寄しかさへや身をつくすらん
〔一体、尤珍重に候〕

〔寄〕鳥〔恋〕 冬

うきしづみ入江の蘆の一夜だに逢てはつらき鳩の通路

〔四句、聞あしく候〕

〔寄〕衣〔恋〕 冬

移り香をとゞめんとだに重ねても化なる中は麻の小衣

〔寄〕衣〔恋〕 冬

49 〔だに〕、心ゆかず候 冬
〔寄〕琴〔恋〕

長かれと神に誓ひしことのねの絶てもいとゞ心ひかる、
〔寄〕舟〔恋〕 冬

50 あふことも波に入江の捨小ぶねすてられし身は寄方もなし

◎あふことも波の入江の捨小ぶねすてられし身は寄方もなし
〔に〕もじ、むつかし。仍——〕

〔奥書〕僻墨二十五首之内／長六首（茶文鼎印「盈／細」）

〔歌上〕仙庵二十首 点八ヶ長弐

〔付箋〕此五十首題ハ作例在之候哉自分ニ御集候哉此方扣ニハ／

無之候題ニ候哥之題ハ飛鳥井家冷泉家古来／ヨリ題者之

家ニて是ヨリ出ルヲ用申候自分ニ／取集申候事無之候

冬音三十首 点十七長四

冬音和歌九首

〔端裏〕享保四年己亥天 水田氏点

〔内題〕両節和調／平井冬音上

元日

1 春もやゝうつろふ庭の松陰に千代を結びし今朝の若水

○春の色もうつれる庭の松陰に千代をくみしる今朝の若水

元日

1 春もやゝうつろふ庭の松陰に千代を結びし今朝の若水

元日

○春の色もうつれる庭の松陰に千代をくみしる今朝の若水

○春の色もうつれる庭の松陰に千代をくみしる今朝の若水

2 長閑しな山のはつかに明初るひかりもしるき春をむかへて
 「山のはつか」「いかゞ。はつか山をよめるやうに候」
 古年に立とはしれど世の人の今朝待得たる春ぞにぎほふ
 「此心、近年よみふるしたり」

3 古年に立とはしれど世の人の今朝待得たる春ぞにぎほふ
 「此心、近年よみふるしたり」

年内立春

4 年はまだ暮ぬ光の陰の中にいつしか春もうつり来ぬらん

○年はまだ暮ぬ光の陰の中にいかなる春のうつり来ぬらん

「尤珍重。引付に相留申候（茶文鼎印「盈／細」）」

5 ふる年の空にも春はめぐる日の雪げの雲とたつ霞かも

○ふる年の空より春にめぐる日の雪げの雲も霞とやみん

「是又珍重に候」

暮果ぬ年のこなたに立初て惜むもしらず急ぐ春哉

「後鳥羽院御到着にむつかしくや」

歳暮

7 こし方は今年も化の夢なれやをしむ心も共にのこらで

とまらねばあらぬいそぎを年波のよるも行かふ里の市人

◎春まつとあらぬいそぎに年波のよるも行かふ里の市人

「見るやうの体、尤甘心。引付に相留申候。但初句、心ゆか

ず候。仍——（茶文鼎印「盈／細」）」

9 とゞまらぬことほりながら年月も惜めばをしく暮て行空
 「下句、かけりてきこえ候」

「奥書」ナシ

J 冬音和歌八首

「端裏」ナシ

「内題」詠八首

杜初冬

1 秋の色も終にもろくて杜の名の木の葉とつもる冬は来にけり

「初句「も」の字など、心ゆかずや」

古寺鐘

2 住寺のあたりしられて吹風□ひゞく末野ゝ入相のかね

○古寺のあたりしられて吹風□ひゞく末野ゝ入相のかね

「珍重に候。但「住」の字、心ゆかずや」

雪中残雁

3 打払ふつばさも無な降雪にしほれてあさる小田の雁がね

○打払ふつばさやおもき降雪にしほれてあさる小田の雁がね

「是又珍重。但「無」といひて、其理下に見えず。仍——」

逢不遇恋

4 ◎逢見しもうしや其夜の兼言に限あれとは契らざりしを

〈難題、よくいひかなへられ候歟。甘心〉

鶴立洲

5 ○己が友声を河洲の月影に立るもまがふ霜の白鶴

〈声をかはすなどよろしく、珍重に候〉

梅花盛久

6 このもとも色香にあまる□□□さかりを春の日数かさねて

○このもとは色香にあける□□□さかりを春の日数かさねて

〈是又甘心。但二句、少無味に候。仍——〉

当座二首

雪中鶯

7 雪はまだふるすを出ぬ鶯の声の匂ひも春にとけ行

〈無味に聞え候〉

夜盧橘

8 枝まもる風や誘ひて閨深き夜半の枕に匂ふ立花

〈ふるめかし〉

〔奥書〕 僻墨五首之内／長一首（茶文鼎印「盈／細」）

夏之部

市郭公 頭字ね

1 ねぬ夜経て今朝ぞ聞うるほとゝぎすなれも初音やたつの市路に

◎（茶文鼎印「盈／細」）ねぬ夜経て今朝ぞ聞うるほとゝぎす

なれも初音をたつる市路に

2 〈此哥入。但此名所に郭公、作例なし。仍無名にいたし候〉

ねのみ聞折しもあれやほとゝぎす待とはなしの市にもとめて

雑之内

故郷雨 かしら字そ

3 そこと見む笹もあれて降雨の雫落さず茂る蓬生

○（茶文鼎印「盈／細」）そこと見む笹もあれて降雨の雫さび

しく茂る蓬生

〈此哥入。但四句、入過候。仍——〉

4 袖ぬらす荒し軒端の雨そゝぎ音さへかはるむかしおぼえて

5 其世には音さへも似ずふりかはる律が宿の雨のさびしさ

〔奥書〕 ナシ

K 冬音和歌五首

〔端裏〕 ナシ

〔内題〕 ナシ

L 冬音和歌七首

〔端裏〕 ナシ

〔内題〕 星夕当座七首倭調 平井冬音上

七夕月

1 天川水のこゝろも澄る夜にわたせる月の御舟涼しき

○天川水のこゝろの澄る夜に月の御舟もわたる涼しき

七夕山

2 ○年毎に一夜をこえて夢山の夢とや星も契り来ぬらん

〈かやうの□哥、不慥候。名所は、晴には用捨いたす事に候。

七夕手向には、くるしかるまじく候〉

七夕河

3 淵は瀬に替るおもへば七夕のあふ夜は猶もやすの川浪

〈安き理り、上に対し聞えがたくや〉

七夕草

4 ○言の葉の露とりそへて花咲る千種やこよひ星に手向む

七夕鳥

5 汝も又こゝろをかけて星合の空だのめなき笠鷺の橋

〈四句、心ゆきても聞えずや〉

七夕扇

6 ○今夜しもかせる扇に通ひ来て涼しさあかぬ天の川風

七夕祝

7 千々の秋幾重かさねて七夕のあふせは尽じ天の羽衣

○幾秋をまれにかさぬる七夕のあふ夜は尽じ天の羽衣

〈一、二句つゞき、如何〉

〔奥書〕右五首、とりぐ／珍重く

M 冬音和歌七首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕ナシ

七月当座

秋旅

1 旅衣馴ぬ夜床のつゆけさを月にうらみてぬるまだになき

くれやすきあきの日影を行くもさと、ひ過る道の程なさ

○くれやすきあきの日影を行くもさと、ひ侘て宿りとらまし

〈尤珍重に候。但結句、心ゆかずや。仍——〉

閏七月当座

寄剣恋

3 我中はまだ刃も見せぬ剣太刀さすがつらさのなきにまかせて

〈二句、聞おほせず候〉

4 うきに今思ひきれとやこまつるぎ共にもろはの中の契りも

◎今はわれ思ひきらましこまつるぎうきはもろはの中の契りに

〈珍重に候。但四句、心ゆかずや。仍——。是又タンザク

の□可被遣候〉

九月兼題和哥

風送菊香

冬音上

露霜のまがきを余所にはほふなり花なき比の菊の追風

○露霜もにほふやいづこ我宿は花なき比の菊の追風

〈珍重〉。但二句、如何。仍——。清書

吹風の誘ふもうれし咲菊の匂ひも袖に余るばかりに

〈「うれし」の詞、不庶幾候〉

7 ○咲しより垣ほを風の吹こしてならぶ軒端に匂ふ白菊

〈よろしく候〉

〔奥書〕 ナシ

N 冬音和歌六首

〔端裏〕 ナシ

〔内題〕 ナシ／平井冬音上

歳旦

1 立かはる年の言の葉改めて世は人なみの春の朝戸出

〈結句など、つまり候歟〉

2 世にさかむ色香をいつと松たてゝ宿に迎へし花の初春

〈猶あるべくや〉

3 雪ながら今朝より春と霞む日にみどりもそひて匂ふ山まゆ

○雪の色も今朝より春と霞む日に光をそへて匂ふ山端

〈此御詠めでたく、引付相留候〉

歳暮

4 わすればや春のいそぎにまぎれつゝうきことそひて暮ゝことしを

〈第四句など、いかゞにや〉

5 おしと思ふ心をしらば暮やらでやすらへあかぬ年の名残も

○おしと思ふ心をしらば暮やらでしばしやすらへ年の別路

6 ○かくて世のいとなみしげき身には猶暮ゝ間はやき一年の空

〈両首とりぐの内、前の哥、尤珍重に聞え候。目出度引付、相留候〉

〔奥書〕 ナシ

O 冬音和歌五首

〔端裏〕 ナシ

〔内題〕 ナシ

四十賀兼題

対亀争齡

冬音

1 くらべてよ猶万代を池水もすめるみどりの亀のよはひに

〈此体、多見え候〉

2 池にすむたからの亀に馴て猶齡ひ尽せぬ万代の春

〈契り猶宿につきせぬよはひ哉たからのかめのすめる池水 政為卿、頗等類歟〉

3

老てなを龜(つと)のうへなる山とのみつもるよはひの程はかぎらじ
 ○老てなを龜(つと)のうへなる山とのみつもるよはひの末はかぎらじ

〈珍重〉

当座

寄床恋

4

起出し名残身にそふ夜床ねにうしやとまらぬ人のおもかけ

○起出し名残身にそふ夜床ねにうしやとまらぬ人のうつり香

〈甘心〉。但「倅」は、此方の心からうかぶものなれば、

「とまらぬ」とはいひがたくや。仍——

5

こぬを待帰るをしたふ朝床にのこるなみだよ何にすさまん

○こぬを待帰るをしたふ床の上に落るなみだよ何にすさまん

〈尤珍重に候。但「朝」の字、二句には相応、初句には如何。

仍——。「のこる」も、右に同じ

〔奥書〕 ナシ

P 冬音和歌四首

〔端裏〕 ナシ

〔内題〕 ナシ

文月兼題和哥

海辺秋来

1

暮ぬまは夏のまゝなる浦波に秋見せ初る三日月の影

〔海辺〕よせなく、ゆるきに候

2

○浦風の音もかはりてきのふけふ秋にほのめく伊勢の浜荻

〔尤珍重〕

3

吹風に秋も来にけり夏暮し浦(つと)の蘆の一夜隔て、

〔是又「海辺」、あしらひ不足に候〕

4

半たつ年のさかひの浦浪に秋を寄たる風の涼しさ

○半たつ年のさかひの浦風に秋を寄くる波の涼しさ

〔あたらしくや。尤珍重。此哥、懐紙代筆にて出候歟。以上〕

Q 冬音和歌四首

〔端裏〕 ナシ

〔内題〕 ナシ

当座題

契

冬音上

1

いつか人のこゝろも見えはれやせん契りし中のうたがはしきも

〔初句字余り、如此の体、風雅・玉葉体とて、大に嫌事に候。

打吟するに、口中にあまりて聞あしく候。風体あしきは不

宜に候〕

2

替らじの人の言葉を伸かけし我誠よりたのむ行末

○替らじの人の言葉の行末を我誠よりたのむはかなさ

〈甘心く。但三句、いかゞ。仍——〉

当座題

庭上竹

3 庭の面にうへてをあかぬくれ竹になれてすぐなるふしもならはめ

起臥もすなをにならへ我友とうへて砌になびく村竹

○起臥もすなほにならへ我友とうへて砌になびく村竹

〈尤珍重に候〉

〈下、ふるし〉

〔奥書〕ナシ

S 冬音和歌三首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕ナシ

閏七月十八日兼題

虫声何方

平井冬音上

1 いくとも分し花野々夕風に遠近まがふ松虫の声

〈無味に候〉

2 尋来て聞どもそこと白露の岡辺にかよふ松虫の声

○尋来て聞どもそこと白露の岡辺にまよふ松虫の声

〈珍重く〉

3 ○誘はれてくるすの小野に鳴虫もいくをそこと聞ぞわかれぬ

〈是又珍重に候〉

R 冬音和歌三首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕ナシ

六月十八日当座題内

外山夏月

冬音上

1 夕立の名残涼しく照添て外山の露に晴る月かけ

〈兼題「夕立」に候。用捨いたす事に候〉

2 涼しくもむかふ外山の松の葉の散うせぬ露に明る月影

○涼しくもむかふ外山の松の葉のみどりの露に明る月影

〈尤珍重く〉。但初句の理り、下に見えず。仍——

3 程なしや向ふ外山の露のまに移るも明る夏の夜の月

被遣候。

〔奥書〕右は兼題替り、閏月「七夕」になり申候。重て御詠出可

丁 冬音和歌二首

〔端裏〕 ナシ
〔内題〕 ナシ

八月十五夜雨降ければ

冬音

1 ○甲斐なしや半の秋の夜を待て雨におもふもあたら月影

九月十三夜

2 染尽す秋に名残と照月のかつらの紅葉色も千入に

○染尽す秋の名残と照月のかつらの紅葉色も千入に

〔右両首、とりく珍重に候〕

〔奥書〕 ナシ

ウ 冬音和歌二首

〔端裏〕 ナシ
〔内題〕 ナシ

五月当座題之内

寄虫恋

冬音上

1 物いはでもゆる虫の類ひともしらずは忍ぶ中ぞつれなき

2 つらからじ独にもすむ虫の名の我から人を思ひ初ずは

○ねにぞなくつらきもにすむ虫の名の我から人を思ひ初ても

〔本哥、尤甘心く。但「人」「独」、同心病に候。仍——。〕

此事、相伝にも有之歟。ふるくよりきらひ申候事に候。伝本には出ぬ事も有べく候〕

〔奥書〕 ナシ

V 冬音和歌三首〔書簡仕立て〔文月三日付〕〕

無垢清浄光

冬音

此題、当国近隣山寺之観音堂奉納与題之内、詠遣仕様に
申来候間、詠遣仕見申候へ共、法門和哥趣意無覚束奉存
候。掛御目申候。御覽可被下候。

1 濁るとも月はよなく江の水にそまぬひかりを見せて宿れる

○濁れども月はよなく江の水にそまぬひかりを見せて宿れる

2 むかふより（ま）をのがさまく影てらす鏡は塵もいとほざるらん

山水の清き流れにやどるてふ月の光ぞ更にさやけき

○山水の清き流れにやどる也もとよりすめる月の光は

〔右二首、とりく甘心く（茶文鼎印「盈／細」）〕

右奉納和哥、可然御加筆奉願候。百首は遅々御覽可被下候。
奉納哥は御覽次第返書御遣可被下奉待候。

上 冬音

文月三日

下 長隣様

W
紀行

〔外題〕 紀行 平井冬音上

〔内題〕 ナシ

時は卯月中つ^{の比}かた、たらちめに随ひ、伊勢国菰野山の出湯にまかる事になんなりぬ。いそぐべきよしなりければ、彼是の用意もとりあえず、俄に首途し侍ることなりき。

1 思ひたつあらしごとくも急ぐよりひとりこゝろに任せても見ず
○旅衣思ひたつてふあらしも急ぐこゝろに任せかねぬる
十九日、天気能調、とく旅立ぬ。

2 わすれめや二十日三十日は遠からぬ旅にもしほる袖の別は
○露ぞをく二十日あまりは遠からぬ旅にもしほる袖の別に「側なりける宮井にたち寄て、卯花のしろふ盛りなるを手折て、道のこと祈る。

3 ぬさならで是を手向の神垣にいのるもうけよ咲る卯花
○神垣や是を手向のぬさと見ていのるもうけよ咲る卯花
〈何に手向る、則ぬさ也〉

そのの景色雨ならんと思ふに、風あらく吹て、行多も見えず。雨ふり出ければ、思ひかけぬるやどりも末遠くて、尾

張国清洲といふ駅にとまる。笠も袖も、のこりなく濡にたれば、あるじの心ありて、『(一ウ)炭火など起し、とかく痛

はりぬ。夜もすがら、雨もおもひもはれまなく、臥ぬ。あけの日は、夜半の空名残なく立出て、佐屋と云所より川舟にのりてくだる。大き成川の、浪おだやかなるが、すへは海に続くよしなれば、さも有べし。伊勢国桑名の湊近く漕

行まゝに、沖の波閑に暮々夕、和に釣舟の行かよふ。汐の干潟のこゝかしこ、洲崎なんど〈「なんど」、よみくせ也〉

4 目^{ぬるにまかせ}に近くおぼゆる山もなみはれてあとははるかにしらむ川水
〈此哥抜〉〈はれてしらむなど、明ぼのゝやうに候〉
見えて、漁父の網引さま、^{ええ}「いはず、面白し。ふねの

5 波の音は塩のさかひも隔てなく川より海にかよふ友舟
6 〇ふねよする湊遙かにのこる日のかげも淋しくむかふ海つら
二十一日、急ぎ立出て、朝明川の辺より駅路をわかれて、

田舎野亭の隈へ、のり侍る馬の口とる人に』(二ウ)まかせて行。打向ふ西に、高き山の滝など白ふ見えけるあたりこそ、かの山となんいふ。遙に程遠し。雲の気色をそろしく、風きほひ、とかくいふうちに夕立て、雨おほひもいそ

ぐべき折からは、何くれとぬれぬ。高根に残る虹の空、日影にほやかに見えて、雨跡なく過ぬ。

7 里見えていさめる駒の急ぐより雨のあしときゆふだちの空
〇里見えていさめる駒の急ぐより雨はあしときゆふだちの空

8

打渡す高根はまだきはるゝ日に「いそがまほしき虹のかけはし
 〈此哥抜〉 〈上下、心ゆきても聞えず候〉

遙なる野を過て、山口に至る。奥は猶かぎりもしらぬ、さ
 がしき谷の滝つ岩間を行登れば、やがて出湯のほとり近く
 なん着ぬ。高き山の腰なかば斗に家居して、二階、三階の
 栖も、あやうくのみ覚ゆ。何がしの家に宿る。猶峯は後に
 高く、ひだりみぎりも同じ山そびへて、松のあらし、滝つ
 瀬も、物の音わかぬばかりはげし。『(ウ)はるかにむかへ
 ば、伊勢や尾張の海の面に、行かふ舟のほのかに見えて、
 三河国なりける山々まで、眺望かぎりなく見えぬ。』

9

○うつすとも筆やは及ぶうみやまのさかひはるかにむかふ限りは
 とゞまるもしばしの程の夜半の夢望むあらしよ吹なほらひそ

○とゞまるもしばしの程の夜半の夢望むあらしよ吹なほらひそ
 時鳥の遍ねく朝夕語らふも、待にはかはるこゝろにて、あ
 かずのみ思ふ。」

11

○ほとゝぎすなれも五月を松にふく風より送る声の隙なさ
 水鶏を聞て、

12

うき旅をわすれてねんもみじか夜はたゞく水鶏に明安き空
 ○うき旅をわすれてぬるもみじか夜はたゞく水鶏に明安き空
 夢中にほとゝぎすを聞て、

13

○鳴ぬなり思ひねし夜のほとゝぎす聞はうつゝかゆめのまくらに
 起出て聞ば類ひもなつの夜の月かげしらむ山ほとゝぎす

14

○起出て聞ば類ひもなつの夜の月にしばなく山ほとゝぎす

故郷より文などおこせけるに、『(ウ)山里の住居、明暮

物静ならんなど聞えける返し事に、

15

聞馴ぬ住居なれば音すごみ松ふくあらし山の滝つ瀬
 ○聞馴ぬ住居なれば音すごみ松ふくあらし山の滝つ瀬
 温泉の験ありて、帰らんことも、ひとへに帰命瑠璃尊のめ
 ぐみ浅からぬゆへとおもへば、南無薬師といふ五字を句の
 上に配りて、一首を詠て、宝前に奉る。

16

猶人もむれよと誰か山ふかく汲□出湯のしるし見せけん
 ○猶人もむれよと誰か山ふかく汲□出湯のしるし見せけん
 此山の宿りも、漸日数つもりにたれど、ひと日、二日は雨
 に障りて、立帰らんあらましも、うちをきぬ。共にむつび
 かたらひ待るとち、名残を惜み、帰るをうらやみなど、か
 れこれ事しげかりけり。道の程遠からねば、つるでに五十
 鈴川清き御宮所に詣でばやと、晴をのみ待ぬ。朝彦の光句
 ひ出て、二十九日、立出る折から、読てかしこの壁に張付
 待る。

17

○おもへ人あかず馴ぬる宿を置て『(ウ)帰る今は名残おしさを
 猶梅雨の天晴やらねば、旅の衣もしほれ待りて、いとゞ侘
 しかりき。斎宮の住給ひし、竹の都のむかし尋侍りければ、
 斎宮は里の名にして、野々宮となん教ゆ。年経る松、木高
 く立けり。奥深き杜の内に、神垣はしるしもなくて、御灯
 ばかり立給ふ。神さびて、かうぐし。へ「かうぐし」
 は、神ぐし也」

18 ○かぞふれば久しき世々に跡たれて」今もすぐなる竹の宮こそ

宮川のこりななど、のこりなく済し侍りて、雨の晴間あり

ければ、心静に、宮めぐりなし侍るとて、

19 あふげなをかしこき国の宮ばしら神も内外の隔て有世を

○あふげなをかしこき国の宮ばしらたてる内外の神のちかひを

20 ○五十鈴川きよき流れに御祓してむすぶ常世の浪の涼しさ

21 ○天雲は遠くもはれて神路山日影匂へる杉の下陰

大淀の浦まで、木のまより遙に』(6ウ) 見え侍れば、

22 大淀の松をはるかにたちかへる波に我身をたぐへ見まほし

○大淀の松をはるかに旅衣たちかへる波に身をたぐへてん

23 早苗とる時や邇しと郭公しでの田長の声しきるらん

〔此哥抜〕

五月五日、山田里を立出るに、けふは異日なればとて、宿

のあるじ、朝立をいはる侍りければ、

24 わすれじなかりの菖蒲の枕だになさけ有ける今朝の名残は

○わすれじな菖蒲の枕かりにだになさけ有ける今朝の名残は」

香良洲の神社に詣で、日の暮なん程、海辺に逍遙し侍り

て、

25 ○立よれば葉分の風の涼しさに波に折敷伊勢の浜荻

26 ○いせの海や浪の千船も限りなき雲につらなる真帆の追風

尾張国熱田の社に参りて、

27 治まれる世をこそまもれくさなぎの剣を神のこゝろにはして

○治まれる世をもやまもるくさなぎの剣を神のこゝろにはして

十一日、ふるさとに帰るべき日数なりければ、今朝はとり

わけ』(7ウ) いそぎて、横雲と共に、うれしく立出ぬ。

28 草枕なれなで幾夜見し夢のかぎりも今朝に残るばかりぞ

○草枕なれつゝ幾夜見し夢のかぎりも今朝に残るばかりぞ

昔享保七壬寅仲夏日

〔奥書〕僻案愚墨二十五首並／詞書花実兼備尤珍重二候／不遠斎

〔茶文鼎印「盈／緇」〕